

清風荘庭園

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 主屋から望む庭園（北西から）

河原町今出川の交差点から東に向かい、賀茂大橋を渡ってしばらく進むと、北側に樹木の茂った屋敷がみえてきます。ここは江戸時代には徳大寺家の清風館という名の別荘でしたが、明治40年(1907)に西園寺公望さいおん じ きんもちの弟である住友春翠すみともしゆんすいへ譲渡され、清風荘と名付けられ公望の京都別邸となりました。その際、屋敷の改築が行なわれ、建物は2代目八木甚兵衛、庭園は7代目小川治兵衛うえし(植治)が担当、大正2年(1913)に完成しました。

公望没後はしばらく住友家が保管していましたが、文部大臣であつ

た公望の遺徳を偲ぶため、昭和19年(1944)に京都帝国大学(現在の京都大学)に寄贈されて今日に至ります。庭園は昭和26年(1951)に国の名勝に、主屋を含む12棟の建造物は平成24年(2012)に国の重要文化財に指定されています。

清風荘は敷地の北寄りに建物があり、南側に造られた庭園は敷地の大半を占めています。主屋建物の前面には芝生が広がり、その南側に池や築山つきやま、それらを巡る園路などが配されています。池は琵琶湖を模した形となっており、滝組や護岸石の配置など、植治の庭の

特徴をよく表しています(写真1)。

これまでに庭園の植栽や池の補修が行なわれてきましたが、抜本的な手入れをしていなかったことで、築山や空閑地には草木が生い茂り、池の護岸や底の傷みが進んでいました。そこで、この庭園を作庭当時の姿に復元して整備活用する計画が持ち上がり、平成18年に学識経験者や行政機関からなる整備活用委員会が発足しました。その指導の下に、平成19年から平成25年にかけて発掘調査を行ないました。

調査は敷地内の広い範囲におよ



写真2 園路の検出（南から）

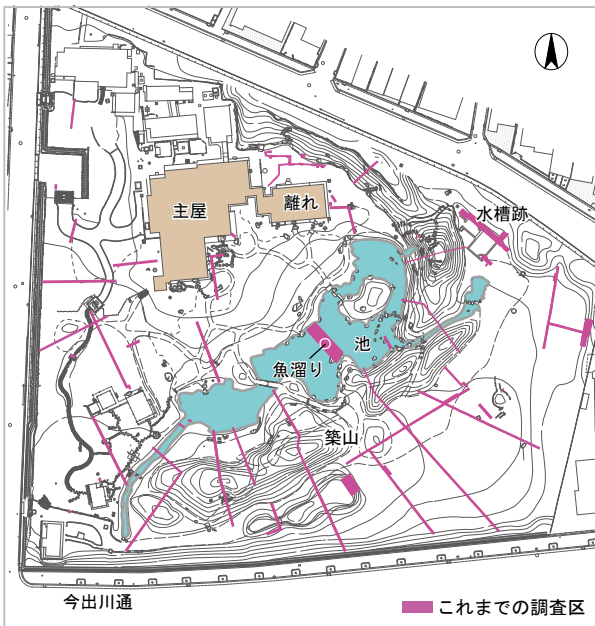


図1 清風荘全体図（1：1,600）

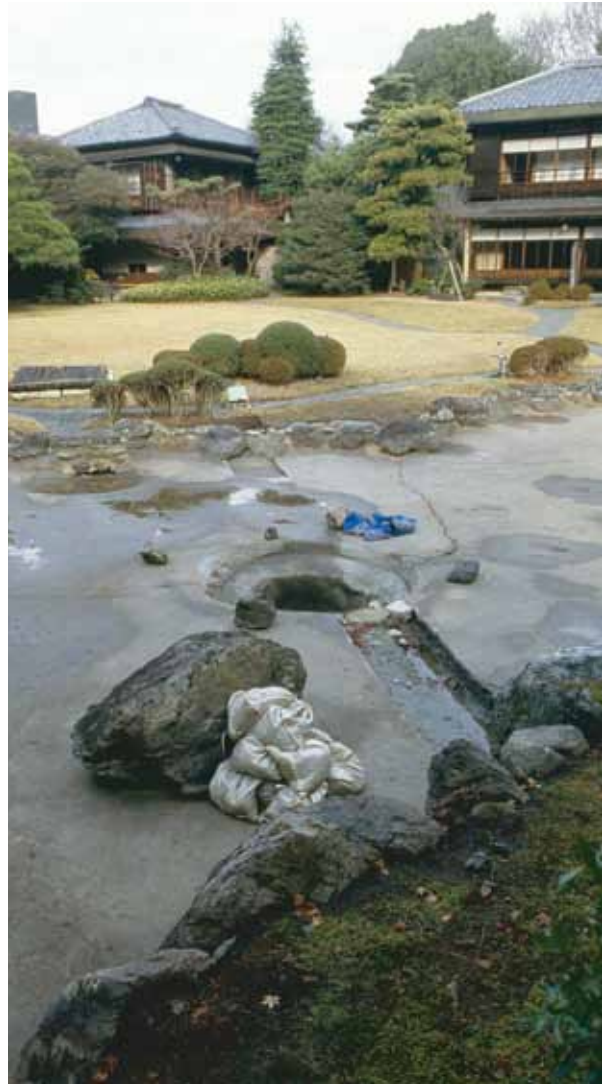


写真3 池の調査（南東から）

対岸に主屋（左）と離れ（右）、池の中央には魚溜りがみえる。

びました。古い絵図や地図などを参考に、腐植土で覆われた不明瞭な園路や築山、傷みの激しい池護岸の状態を確認するために調査区を設定しました。

調査は、まず腐植土や苔などの表土を取り除き、整地土の違いを観察しながら園路や築山の形状を検出していきます(写真2)。また、構築状況を明らかにするなど、必要に応じて土層断面を観察するために部分的に掘り下げることがあります。このように庭園の発掘調査では、現状を傷めないように、掘り下げる深さや調査区の大きさを必要最小限にとどめることが原

則となり、一般の発掘調査と大きく異なる点です。調査では、表土に埋もれた石敷きの園路や築山に続く石段などを検出しました。また、庭の北東部にあったコンクリート製の方形構造物が水槽であったことがわかりました。

さらに、池の護岸や底中央にある魚溜りも修理のために調査をしました(写真3)。護岸や池底の調査では、モルタル底が経年劣化や植栽の根によりひび割れが生じ、隙間からの水の流入で底に貼られた粘土が流出したことが漏水の原因とわかりました。魚溜りは2回修復されていたことや、その

下は円形縦板組みの井戸であったこともわかりました。このような調査成果をもとに、園路や築山、池底などの修理がすすめられ、整備は平成25年度に終了しました。

また庭園整備とは別に、平成27年に防火設備設置のために行なった調査では、離れの北側で建物基礎を6基検出しました。離れ建物は、昭和の初めに当初の位置から南の現在の位置に曳屋されたという記録を裏付ける発見もありました。いつの日か、修復整備された清風荘が広く公開されるなど、活用される日が楽しみです。

(田中利津子)